

2016 年 9 月 24 日

## 円勝寺・成勝寺跡の発掘調査

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 近藤奈央

### 1. はじめに

平成 27・28 年度に、京都市美術館の再整備事業に伴い発掘調査を行いました。複数年にわたって同敷地内で調査が計画されており、今回紹介するのは第 1・2 期調査となります。調査地は、京都市左京区岡崎円勝寺町に所在しています。平安時代後期に建立された六勝寺のうち、円勝寺および成勝寺の推定地にあたり、弥生時代から古墳時代の集落跡である岡崎遺跡のほぼ中央に位置しています。

調査では、円勝寺および成勝寺に係る区画溝などや、その下層で古墳時代前期の遺物が多く出土した溝や、弥生時代後期から古墳時代後期の流路跡を発見しました。発掘調査で明らかになった成果について紹介します。

### 2. 円勝寺・成勝寺の歴史

円勝寺・成勝寺は院政の舞台となった白河街区跡の中心にありました。白河街区は、平安時代後期に大規模に開発された鴨川の東岸地域です。平安京の二条大路を延伸した二条大路末と、その東端に造られた広路（車道）と呼ばれた南北街路、それに面して建立された法勝寺を基軸とし、周辺一帯の道路や街区が整備されました。11 世紀末から白河南殿などの院御所やそのほか多くの寺院が建てられ、周辺にはそれらに関わる雑舎や宅地、工房などが立ち並んでいたとされています。藤原氏累代の白河殿が白河天皇に献上されたのを契機とし、承保 2 年（1075）に法勝寺の造営が着手されました。法勝寺は承暦元年（1077）に供養され、康和 4 年（1102）に堀河天皇による尊勝寺、元永元年（1118）に鳥羽天皇による最勝寺、久安 5 年（1149）に近衛天皇による延勝寺が次々と御願寺として供養されました。このように、「勝」字の入る寺院が建立されたことから、「六勝寺」と総称されました。

円勝寺は大治 3 年（1128）に鳥羽天皇の皇后待賢門院（藤原璋子）の御願により創建されました。木作り始めは天治 2 年（1125）で、大治元年（1126）に東塔（三重塔）が最初に建立されています。翌 2 年に中塔（五重塔）や西塔（三重塔）、金堂や五大堂（桁行五間）、薬師堂（九間仏堂）などは大治 3 年（1128）、御堂（六時堂）は大治 5 年（1130）に供養されています。その他、寢殿、西北廊、御湯屋、二階門、鐘楼、西面門、築垣があったされています。

成勝寺は保延 5 年（1139）に崇徳天皇の御願により創建されました。金堂（七間四面）、東西軒廊、東西廻廊、経蔵、鐘楼、南大門、北門、東西門があり、他に、五大堂、観音堂、総社、宝蔵、政所、修理所が推定されています。

円勝寺・成勝寺ともに承久元年（1219）の火災により、主要伽藍（金堂、塔）が焼失しましたが、文献史料からはその後も存続していたようです。応仁・文明の乱が勃発した応仁元年（1467）の翌年、残っていた建物も戦火によって焼失し、両寺院ともに廃絶したようです。

### 3. 調査の概要

下層の岡崎遺跡の遺構として、北東から南西方向に流れていた流路 1100（湿地 460）と溝 459 を確認しました。流路 1100 は、幅 25 ～ 28 m、深さ 0.8 ～ 1.1 m の弥生時代後期以前から湿地化し始めた自然流路です。弥生時代後期から古墳時代後期にかけて、西岸から多くの遺物が投棄されていました。土器の中には特殊な形のものが含まれており、その出土状況から水辺の祭祀を行っていたようです。溝 459 は、流路 1100 西岸に沿って人工的に掘削された、断面が逆台形の溝です。短期間で埋められましたが、多量の古墳時代前期の土器が出土しました。環濠の可能性あります。

平安時代後期から鎌倉時代前期の遺構を多数検出しました。南北方向の溝 327・900 の両側に、小規模な建物や井戸、土坑などがあります。建物や柵としての復元ができなかった柱穴が多数あり、建物の柱周辺に集中していることから、建て替えや増築、添え柱などの可能性が考えられます。溝 900 は規模が大きく、検出長は 55 m、幅 3 ～ 5 m、深さ 0.7 m を測ります。埋土には 11 世紀から 12 世紀の瓦が多量に含まれていました。11 世紀の瓦は法勝寺や尊勝寺で使用されていた文様を持つものも多く出土しています。この溝 900 の東側は 0.2 ～ 0.3 m 程度西側よりも一段高くなっていました。また、この部分には南北方向の柵が重複して造られていたことから、区画として機能していたと考えられます。区画溝は円勝寺と成勝寺の境界をなすと考えられます。調査区北端では、東西方向の溝および築地の地業とみられる版築を確認し、円勝寺・成勝寺と二条大路末の境界が明らかになりました。岡崎グラウンドとの調査成果を合わせて、二条大路末の街路幅が約 30 m（10 丈）であり、平安京の大路幅に準じていた可能性が高いと思われます。

### 4. 出土遺物の概要

弥生時代後期から古墳時代後期の土器や石器、平安時代中期以降の土器や瓦類などが多く出土しました。平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物には、土師器皿などの供膳具の他に、煮沸具の瓦質土器鍋・羽釜などが含まれていました。また、金銅製飾金具や土塔などの寺院を窺わせるような遺物が少量ながら出土しています。出土遺物の大半を占める瓦類の産地は、山城・播磨・丹波・大和・讃岐・備中などに推定され、周辺の寺院同様に、その半数が遠隔生産地から運び込まれていました。

### 5. まとめ

周辺の調査では、弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴建物や方形周溝墓などを発見しており、流路などからの遺物出土量も多く、生活が連綿と営まれていたことが分かっています。今回の調査地は、集落の東辺に当たると推定され、その縁辺部で祭祀が行われていた可能性が高くなりました。

区画溝を確認したことにより、円勝寺の寺域や規模が明らかになってきましたが、伽藍配置など不明な点がまだ多く残っています。今年度以降の調査に期待が膨らみます。

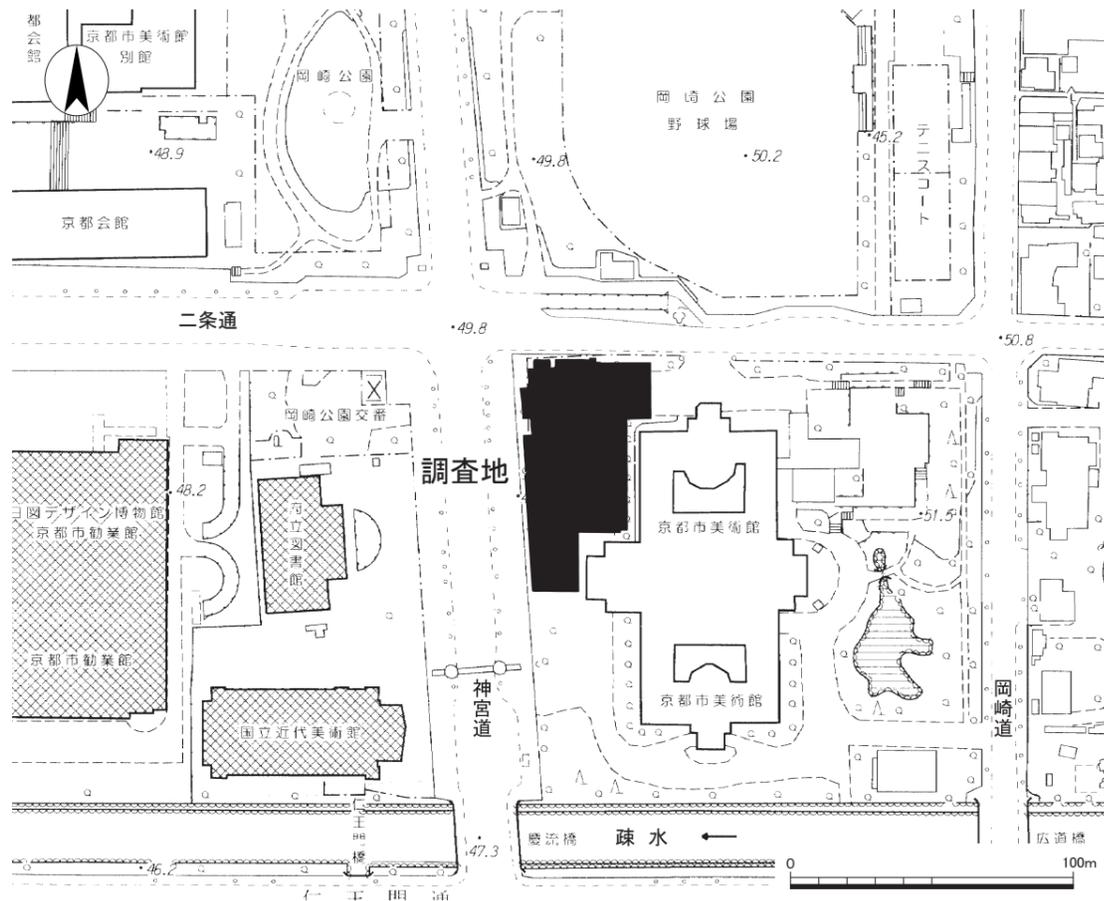


図1 調査地位置図 (1 : 2,500)

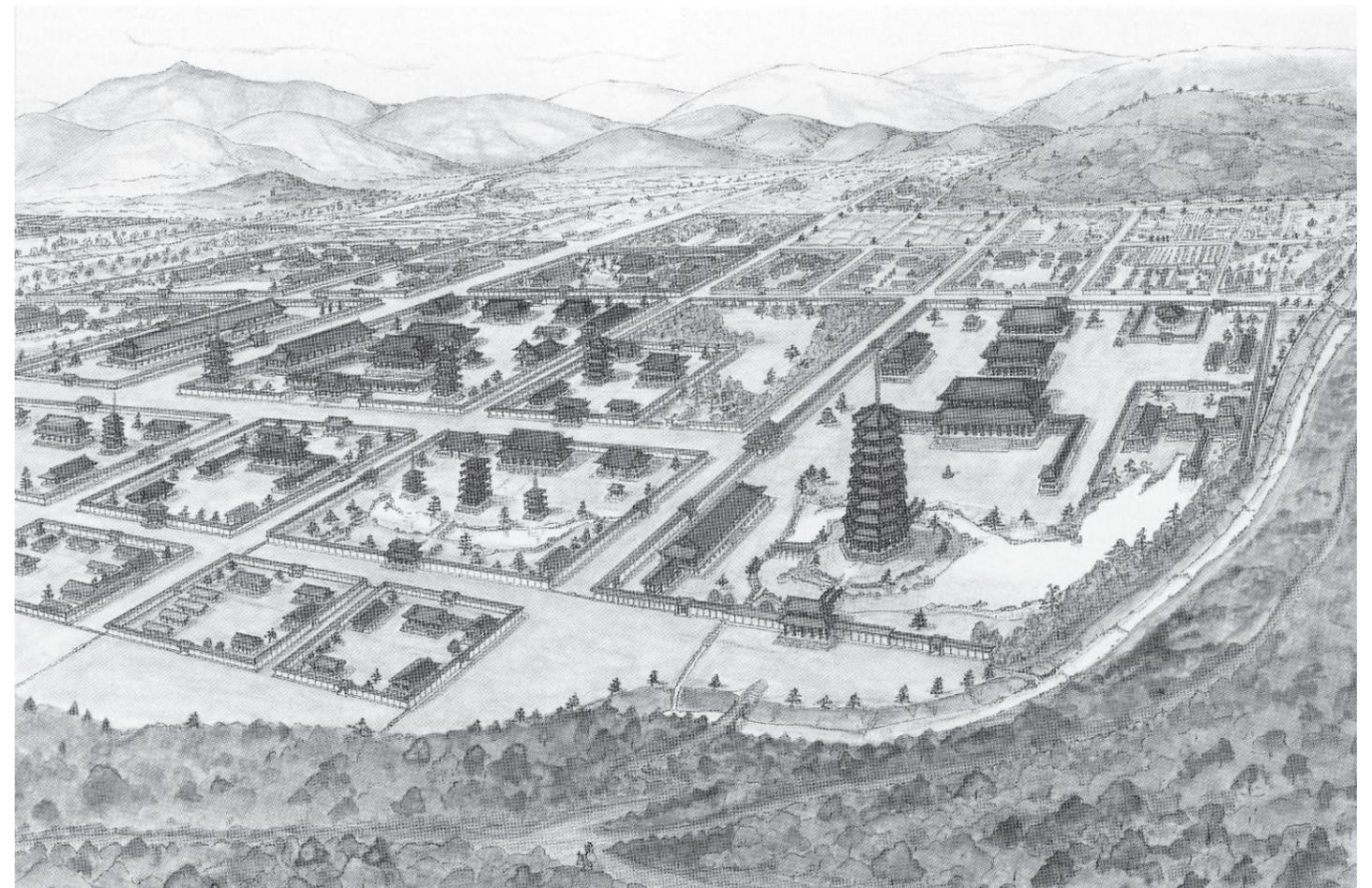


図3 六勝寺復元図〔梶川敏夫『よみがえる古代京都の風景－復元イラストから見る古代の京都－』2016年〕

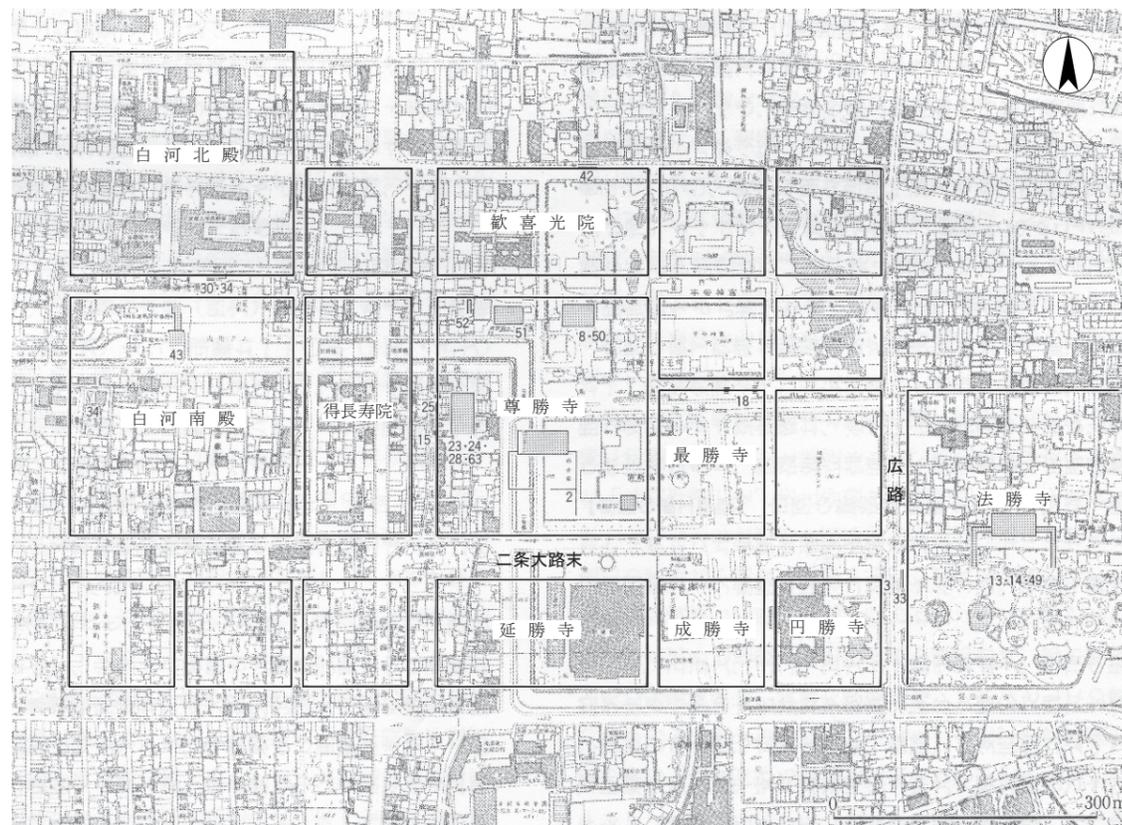


図2 白河街区地割復元図〔『平安京提要』角川書店、1994年を改変〕

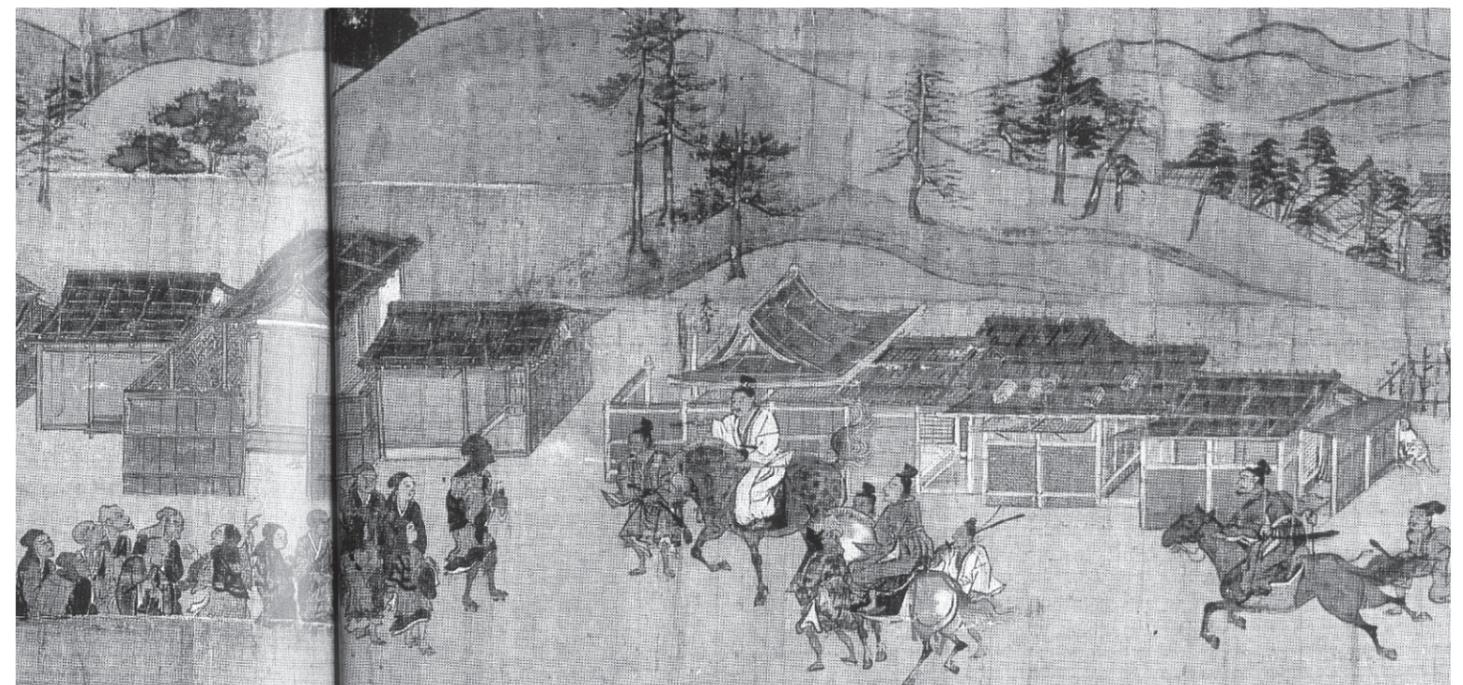
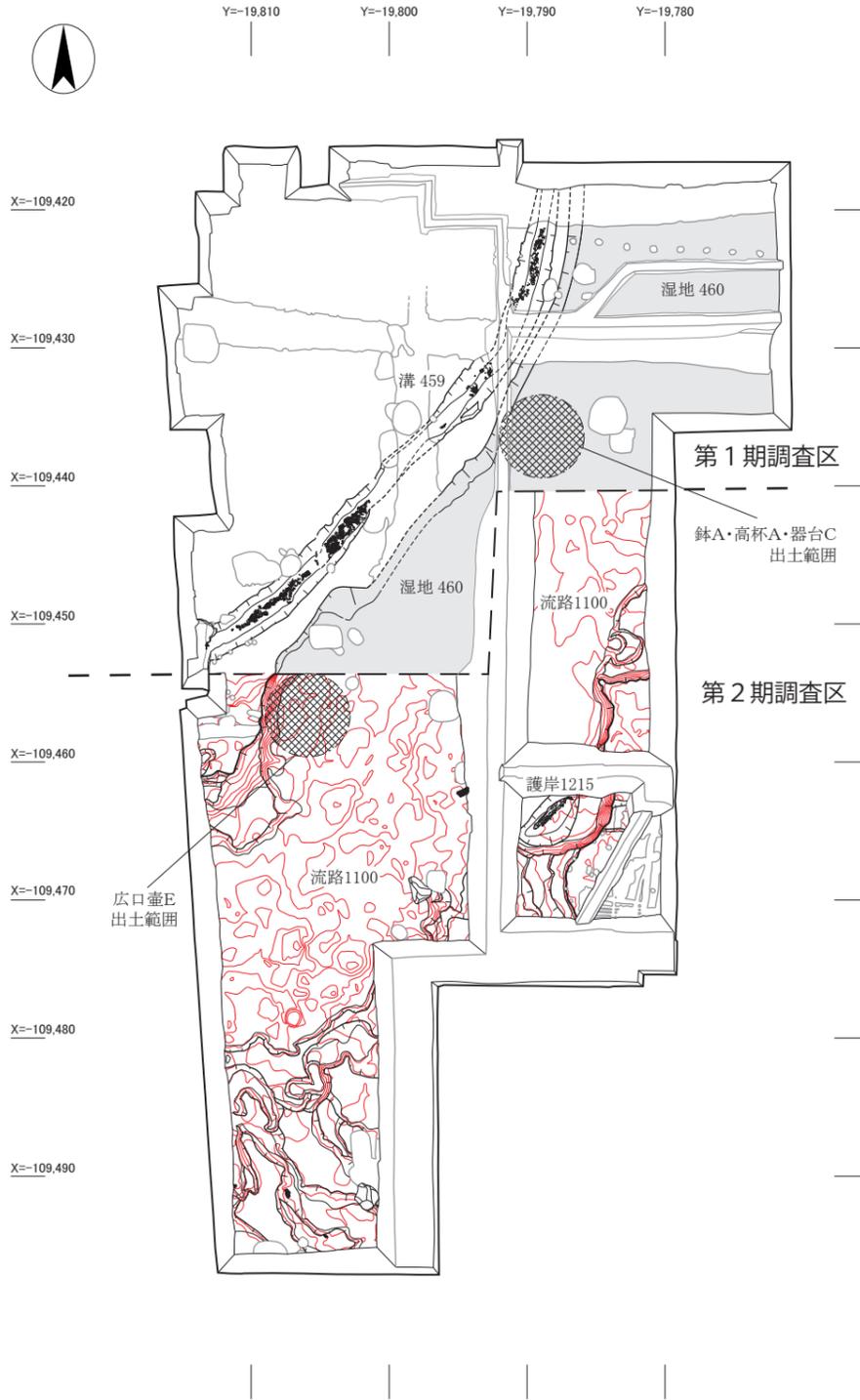
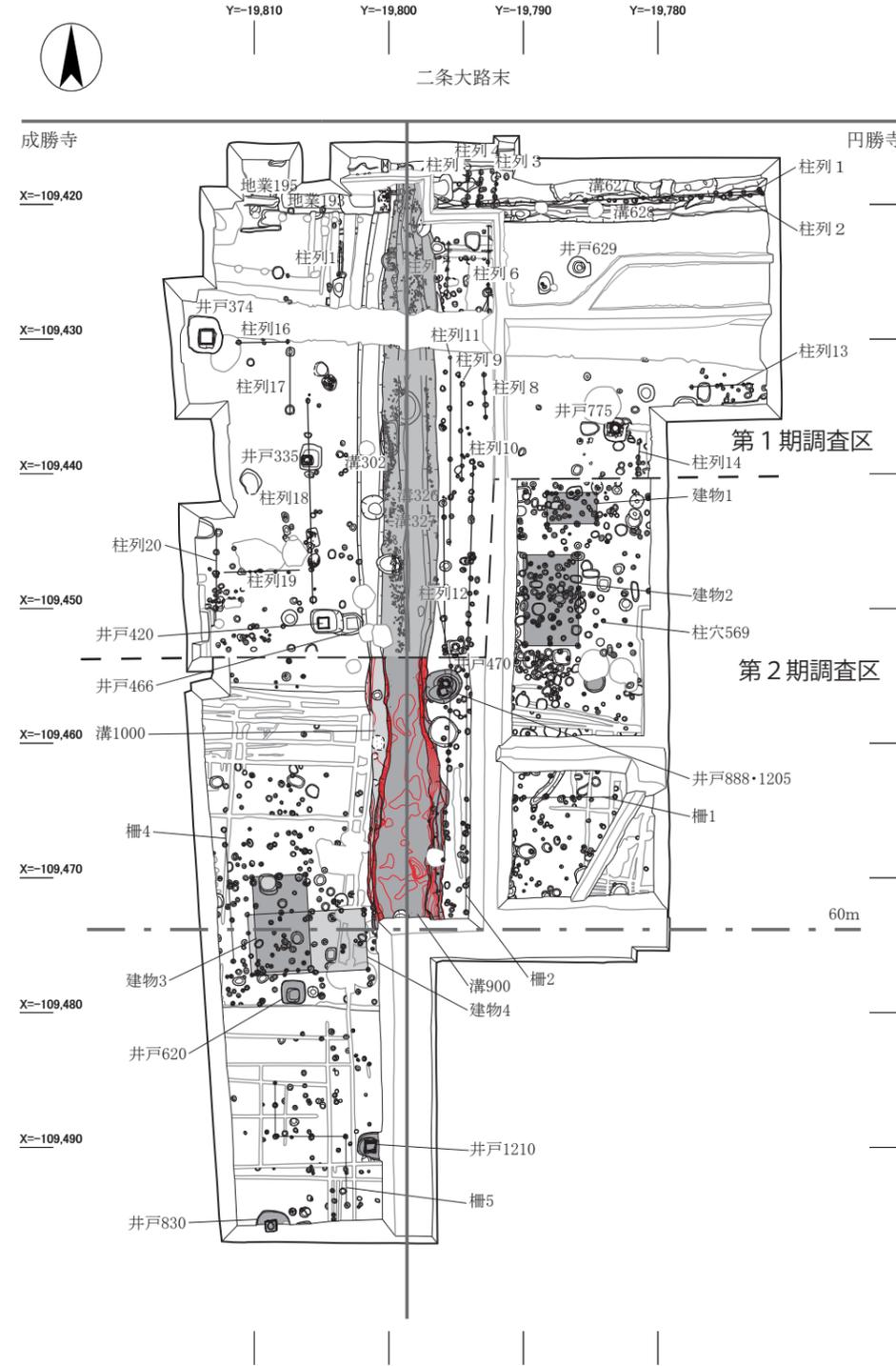


図4 『一遍聖絵』巻五〔『よみがえる中世3－武士の都 鎌倉－』平凡社、1989年〕

〔弥生時代後期から古墳時代後期〕



〔平安時代中期末から鎌倉時代前期〕



〔鎌倉時代後期から江戸時代〕

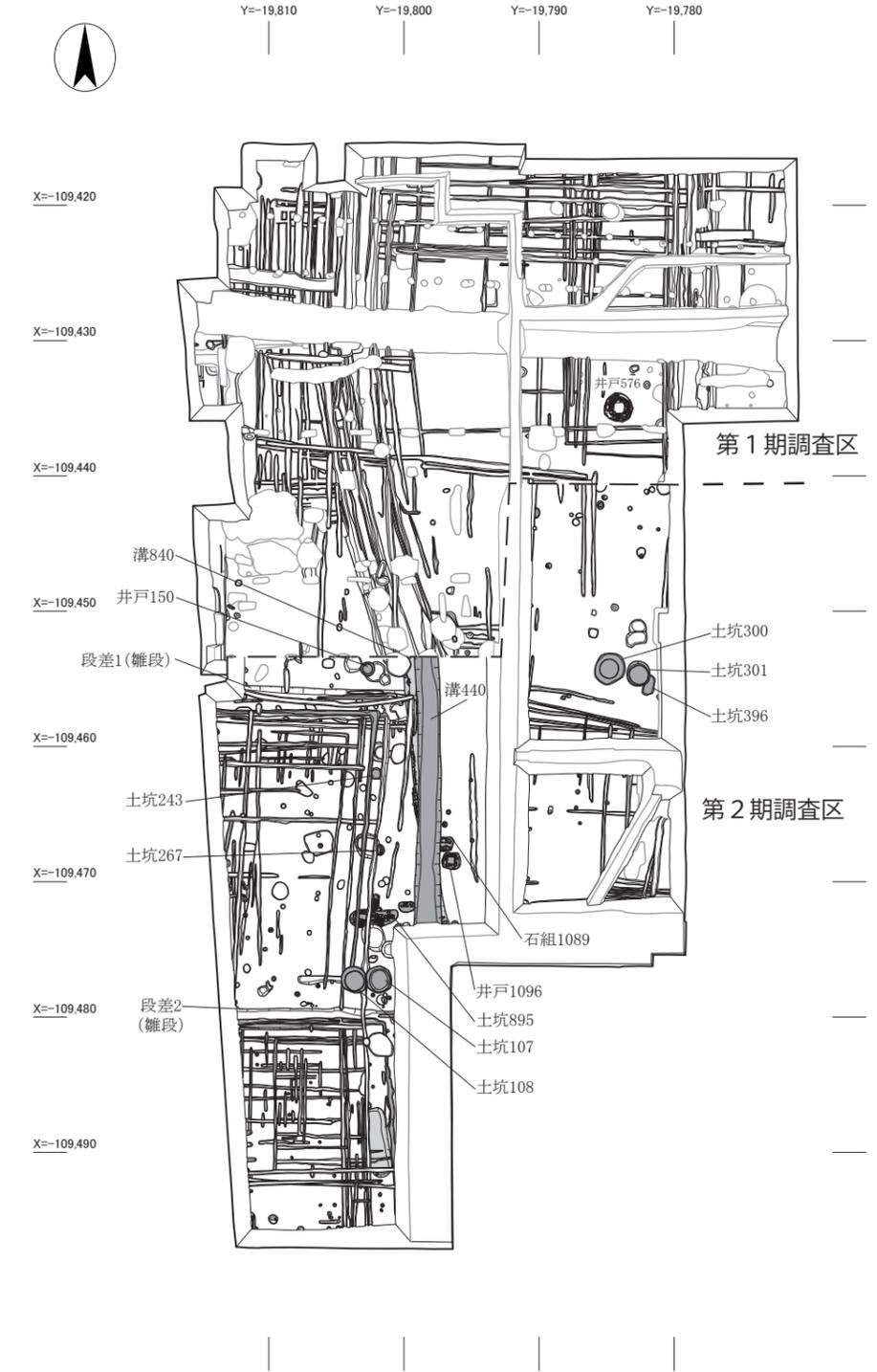


図5 遺構変遷図(1:500)

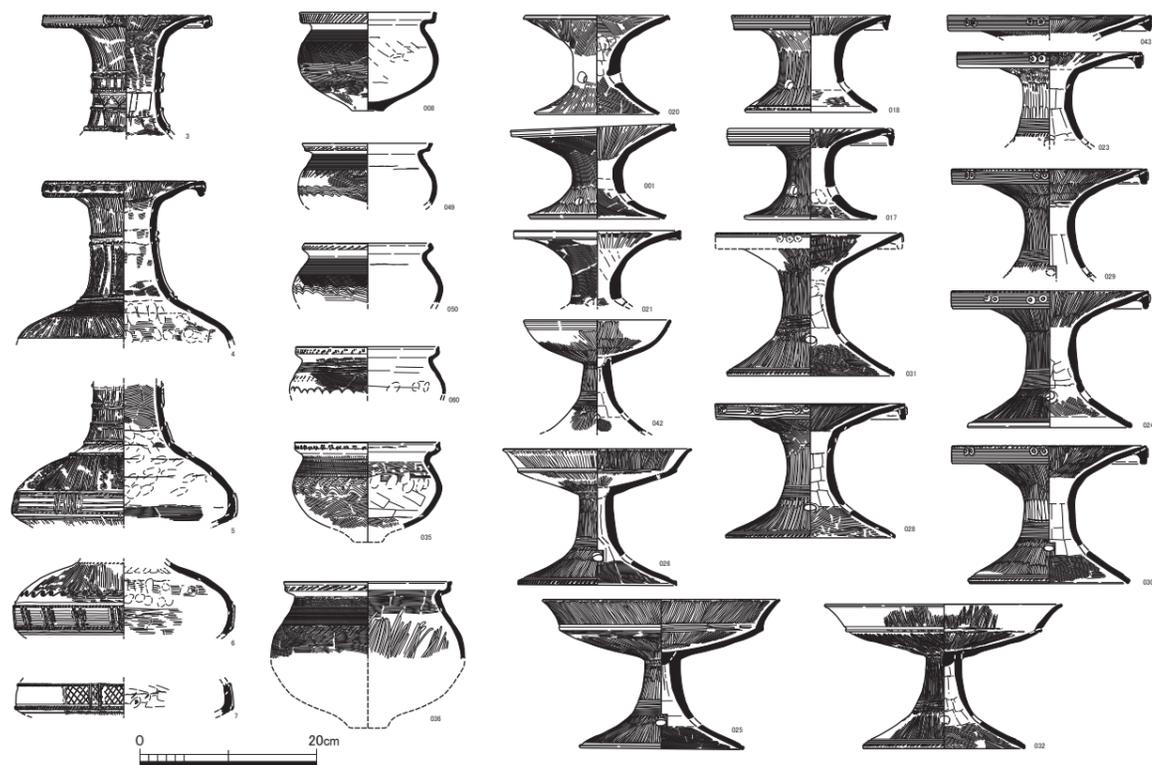


図6 湿地460・流路1100出土土器実測図(1:8)

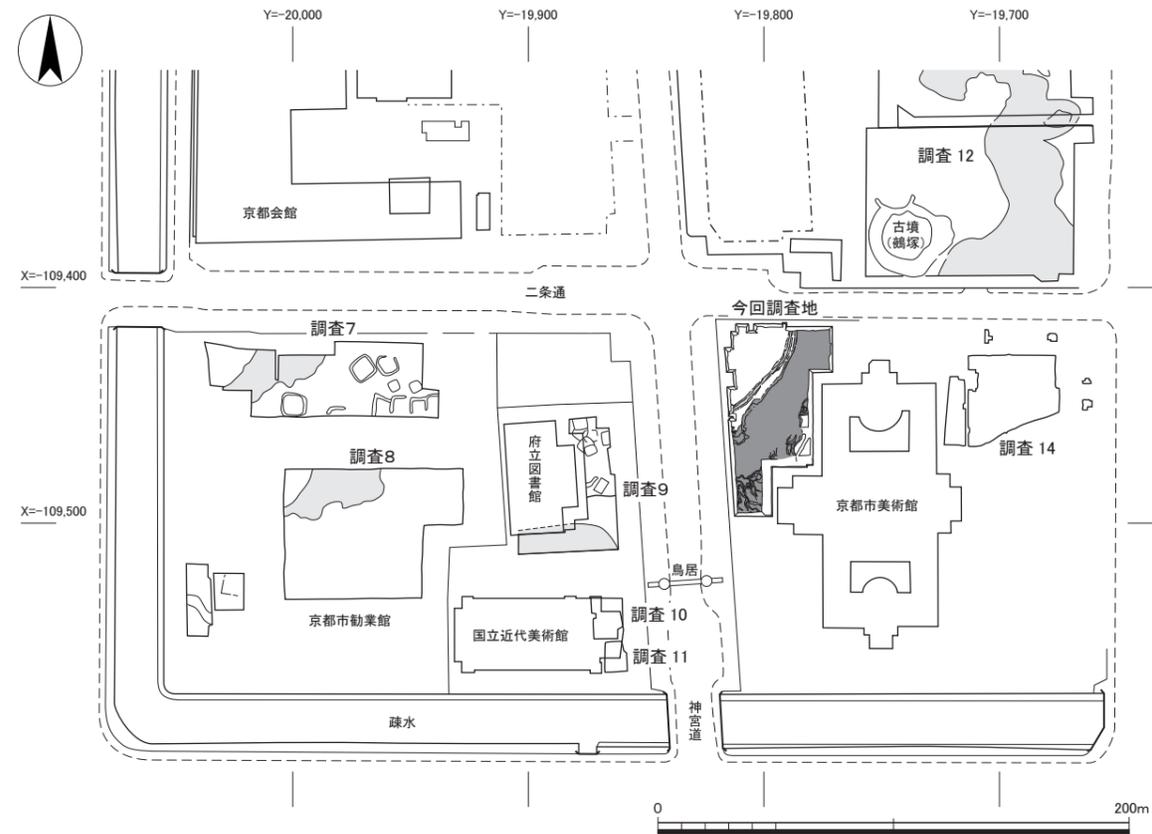


図8 周辺調査遺構配置図〔弥生時代後期から古墳時代後期〕(1:3,000)

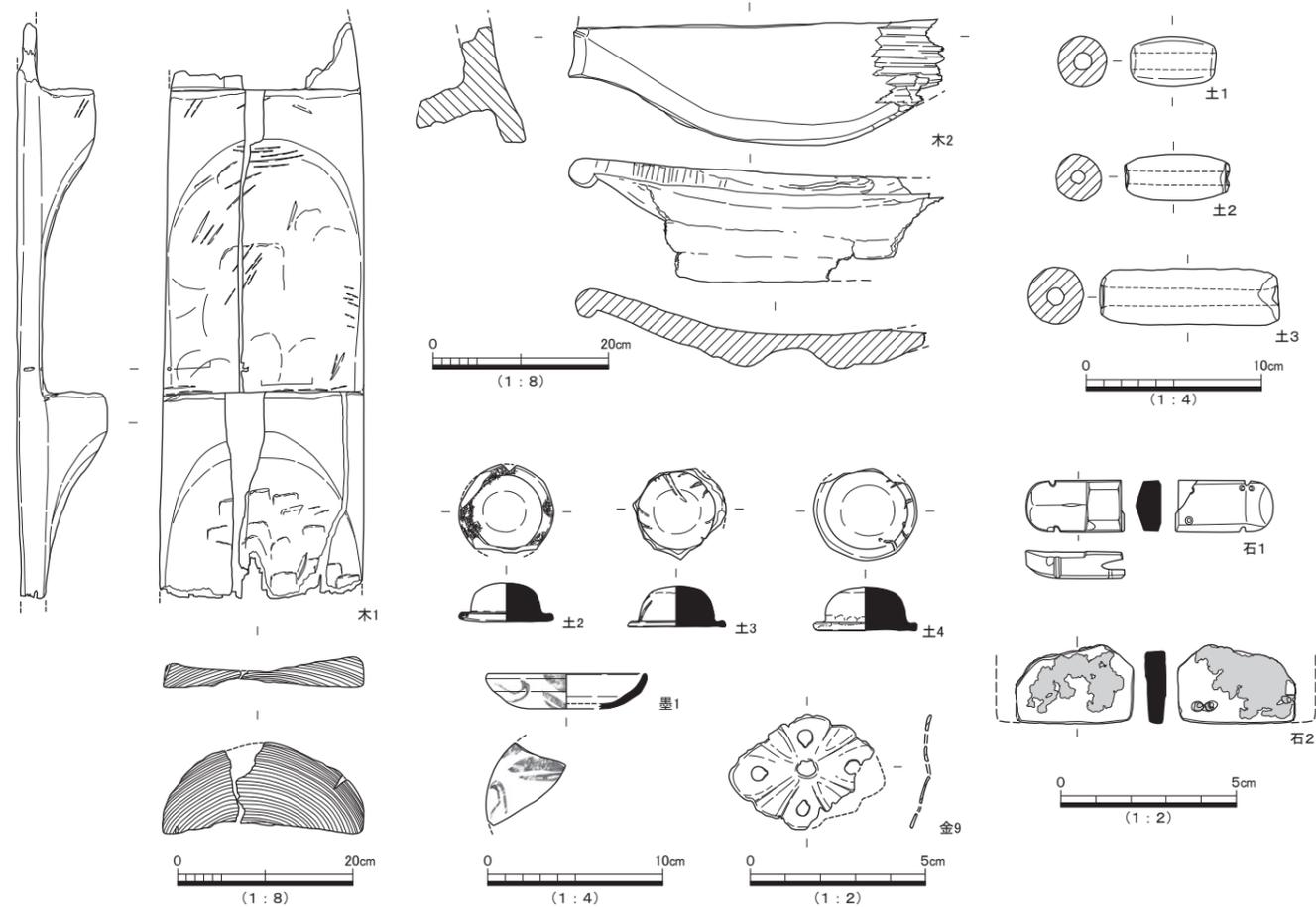


図7 第1・2期調査出土遺物実測図(1:2、1:4、1:8)

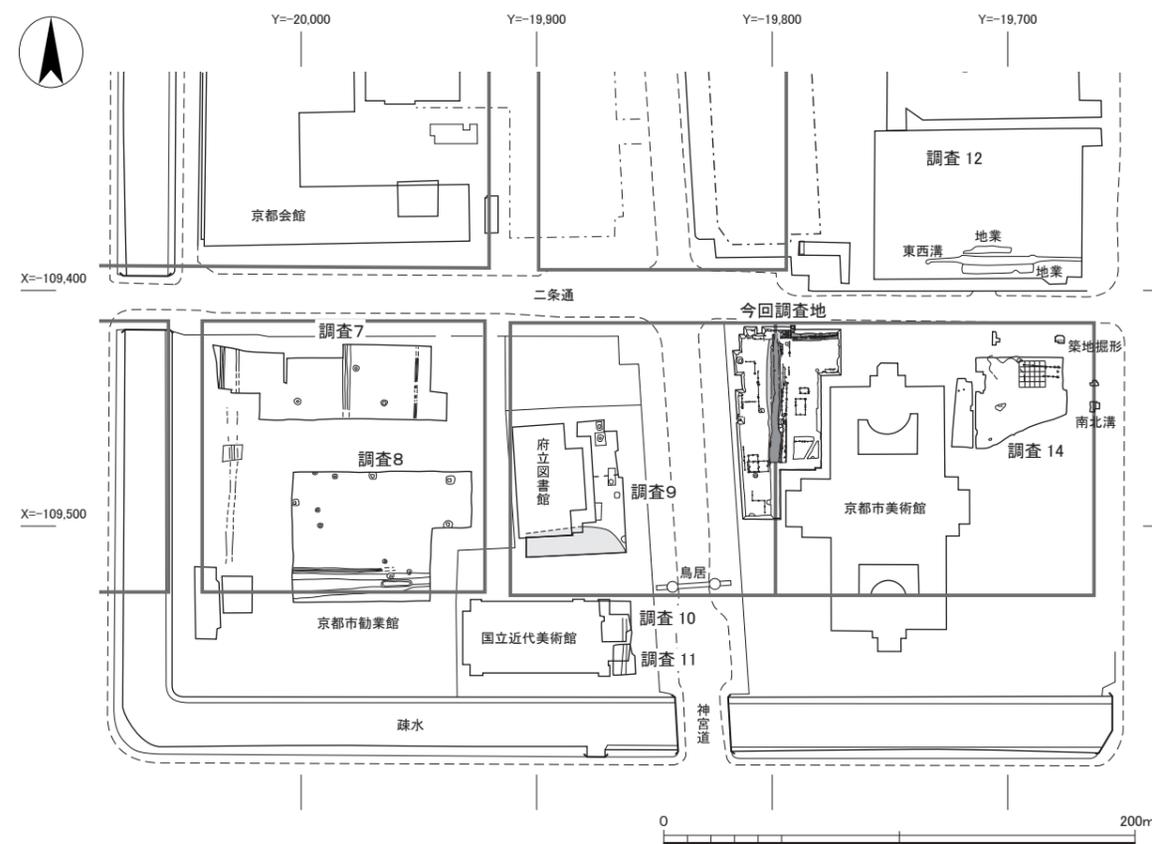


図9 周辺調査遺構配置図〔平安時代から鎌倉時代〕(1:3,000)